

木でつくる文化創造の城

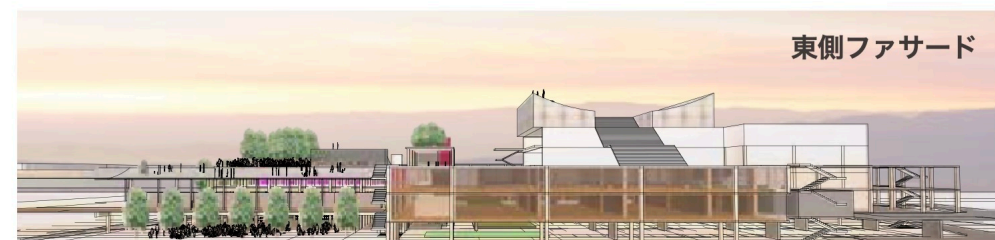
回廊で繋ぐ「音楽ホール」と「中心部震災メモリアル拠点」

設計において、大ホールのヴォリューム感を肯定的に捉える空間を提示したいと考えています。具体的にはクワイエットスペースを屋上に配置し、緑と川に囲まれた豊かな自然の中に人々がそれぞれに対峙する体験を得られる空間を実現します。祈念の日やイベントの際には多くの人々が一度に集う祝祭性の高い空間へと変貌します。日常的には、目的を持った人もそうでない人も、視線を遮るもののない広い空間の中でそれぞれの想いを巡らせることのできる空間として機能します。全体の大きなコンセプトとしては、鉄筋コンクリート造あるいは木造による文化芸術の「櫓」同士を、地下鉄駅上階広場に貫入して国際センターと本計画地とを繋ぐ「回廊」によって結びつけます。強固でありながら、どこか懐かしさを覚える現代における木と石積みの空間、「芸術文化の城」をこの場所に皆さんと共に計画して行けることを願っています。

(設計の理念と考え方)

1. ブリッジによって繋がれる「音楽ホール」と「中心部震災メモリアル拠点」

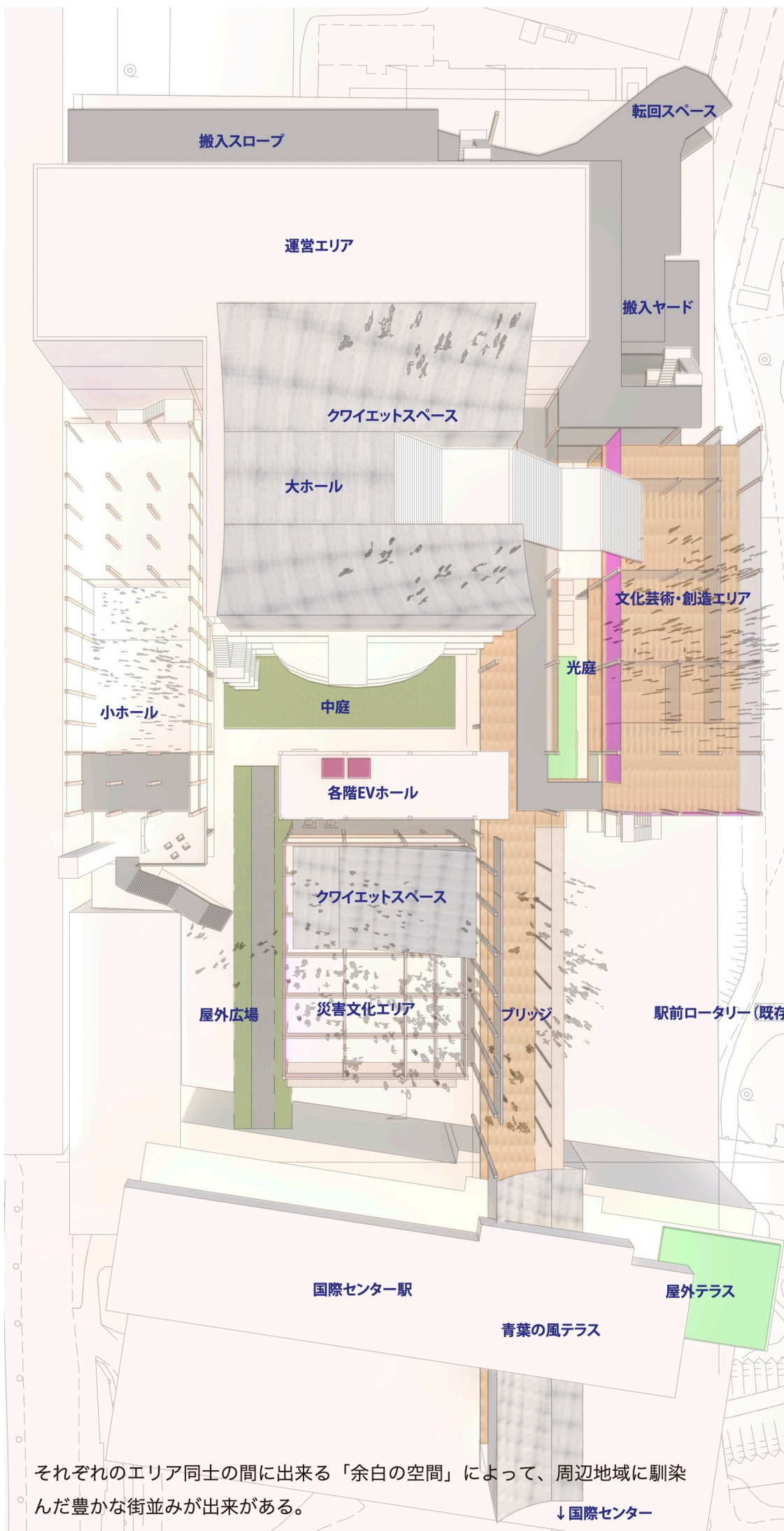
- A. 地下鉄駅2階レベル（青葉の風テラス、屋外テラス）とブリッジによって接続し、さらに国際センター側への延長を提案することで、地域一帯の回遊性を図ります。
- B. ブリッジを起点として、複数の建築エリアが接続する構成とし、分棟化を含めて、建築ボリュームを分節して周辺地域に馴染む風景とします。
- C. クワイエットスペースを建築内外に分散配置し、ブリッジ、屋外広場を含めて立体的に連続する、豊かな公園のような建築とします。



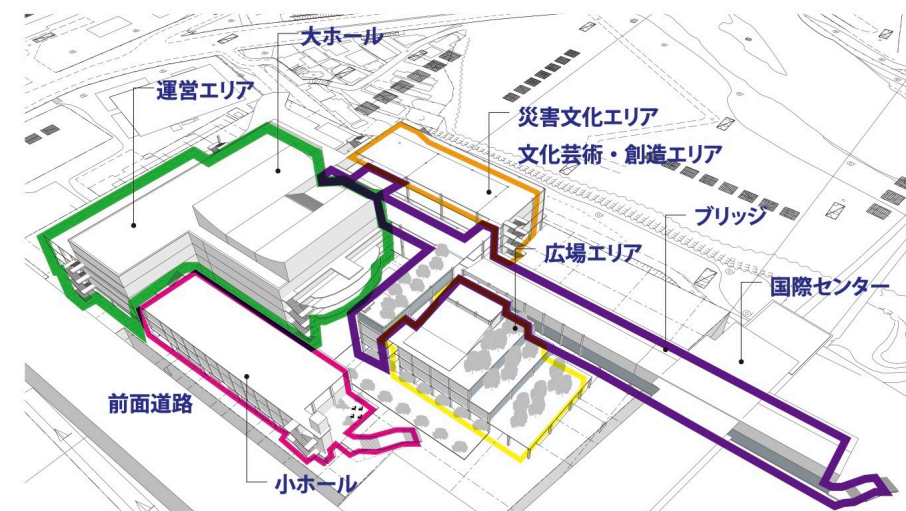
(設計を進める上で特に留意すること)

2. 多くの分野からの参画を促すワークショップの実施

- A. 模型やモックアップを中心とした検討プロセスを重視し、関係者にとって具体的でわかりやすいコミュニケーションの仕方を模索します。
- B. 実施設計や現場監理の段階においても、提案コンセプトを維持する「マスタープラン」を策定します。分棟形式によって各棟の内部で設計を簡潔させやすくする一方で、相互のエリア同士によって作り出される「街並み」を調和のとれた計画とします。
- C. 多くの分野からの参画を促すワークショップを実施します。一部の特定の団体による主張だけでなく、幅広い声を聞き取る機会を積極的に提案します。



それぞれのエリア同士の間出来る「余白の空間」によって、周辺地域に馴染んだ豊かな街並みが出来る。



ブリッジによって4つのエリアを分棟形式として計画

(コスト縮減に関する提案)

3. 分棟形式による用途に応じた合理的な構造・設備形式の採用

- A. (地上階と比較して) コストの高い地下階を設けないことで、イニシャルコストを縮減します。
- B. 分棟形式とすることで、用途に応じた合理的な構造形式を採用します。大ホールと運営エリア及びブリッジ部分には鉄筋コンクリート造 (RC造) を採用し、振動騒音対応および屋上面のクワイエットスペース等の荷重への対応を想定します。小ホールを含むその他のエリアについては、木造による構造形式を採用し、建築の軽量化及び基礎構造の単純化を図ります。
- C. 大ホールエリアと運営エリアについては中央熱源方式を採用し、その他のエリアについては個別分散熱源方式を採用し、運営状況に応じた空調エリアの切り替えをしやすいとします。

(将来の大規模改修を想定した設計上の配慮)

4. 順次更新が可能な「居ながら改修」をしやすい全体構成

- A. 分棟とすることで、大規模改修時の一時閉鎖による他エリアへの影響を最小限にとどめます。(改修時期をずらすことが可能)
- B. 建築へのアプローチを複数設定することで、大規模改修時にも持続的な利用を担保する。
- C. 設備機械室へのアプローチのしやすさ、または十分な作業空間の確保をすることで更新時の施工がスムーズに行われるような設計とします。
- D. 社会情勢の変化に伴う、木造部分の部分的な増築や建て替え等にも対応しやすい構成であり、維持管理コストの調整を図りやすい計画とします。

